

発表題目：語彙と規範
—R.ブランドムの推論主義におけるネオプラグマティズムの一系譜—

朱喜哲(大阪大学)

本発表の目的は、現代の分析哲学において「推論主義」を掲げ体系的議論を展開するロバート・ブランドムの「語彙 vocabulary」概念の取り扱いに注目し、それを通じて彼が棹さしている「ネオプラグマティズム」の一潮流、とりわけブランドムにとっては博士論文指導教官でもあるリチャード・ローティから何をどのように引き継いでいるのか——あるいは引き継いでいないのか——の一端を明らかにすることである。この問いをさらに敷衍すれば、それは「ローティからネオプラグマティズムを引き継ぐことと体系的哲学を展開することとはいかにして両立しうるのか」ということでもある。

ブランドムは、彼の名が広く知られることになった大著 *Making It Explicit*, 1994 を、ウィルフリド・セラーズとローティの両名に捧げている。この両名がいずれも彼の思想における源泉の一角を担っていることは疑いえないことではあるが、そもそもブランドムが再評価の一つの契機をつくり、その解釈を通じて自身の哲学を形成していったといって過言ではないセラーズからの理論的な受容については本人の数々の言及とあわせて広く知られているのに対して、ローティからの理論的な影響関係——伝記的事実や思想史的なものから離れた理論的な受容および批判関係——に関しては、さほど議論が醸成されていない。

こうした現状は、ブランドムに起因するというよりはむしろローティがとりわけ *Contingency, Irony, and Solidarity*, 1989 以降、論理実証主義以来の自然科学を範としてきた分析哲学の領域ではなく、社会哲学や政治哲学で取りざたされるようになり、理論的というよりは脱-理論、もしくは解体的な哲学言説の担い手であると見なされるようになったことが大きいといえよう。ブランドムは、こうしたローティの「プラグマティズム」を受容した上で、それと同時に言語と世界、意味と使用についての包括的な哲学的理論の構築を自身のプログラムとする。それはいかにして両立可能なのか。

本発表では、ブランドムが「意味-使用を一つの視野から捉える試みである」と標榜する *Between Saying & Doing*, 2008 において「意味-使用」に対応する「語彙-実践(能力)」として登場する「語彙」概念の取り扱いを確認し、あわせてローティ自身の「語彙」概念の理論的な位置づけと、ブランドムのいくつかのローティ論あるいはプラグマティズム論とを参照することで、この概念がローティのそれに由来していることを示す。その上で、両者が等しくしている立場——「ネオプラグマティズム」——において、それでもなお両者を分かつ点は何であるのかを明らかにしたい。